

2001年9月2日

神からの悪霊－サウルの病的な精神状態

【聖書】サムエル記上 18章1～16節

◆ダビデに対するサウルの敵意

18:1 ダビデがサウルと話し終えたとき、ヨナタンの魂はダビデの魂に結びつき、ヨナタンは自分自身のようにダビデを愛した。18:2 サウルはその日、ダビデを召し抱え、父の家に帰ることを許さなかった。

18:3 ヨナタンはダビデを自分自身のように愛し、彼と契約を結び、18:4 着ていた上着を脱いで与え、また自分の装束を剣、弓、帯に至るまで与えた。

18:5 ダビデは、サウルが派遣するたびに出陣して勝利を収めた。サウルは彼を戦士の長に任命した。このことは、すべての兵士にも、サウルの家臣にも喜ばれた。

18:6 皆が戻り、あのペリシテ人を討ったダビデも帰って来ると、イスラエルのあらゆる町から女たちが出て来て、太鼓を打ち、喜びの声をあげ、三絃琴を奏で、歌い踊りながらサウル王を迎えた。18:7 女たちは楽を奏し、歌い交わした。「サウルは千を討ち／ダビデは万を討った。」18:8 サウルはこれを聞いて激怒し、悔しがって言った。「ダビデには万、わたしには千。あとは、王位を与えるだけか。」18:9 この日以来、サウルはダビデをねたみの目で見えるようになった。

18:10 次の日、神からの悪霊が激しくサウルに降り、家の中で彼をものに取りつかれた状態に陥れた。ダビデは傍らでいつものように豎琴を奏でていた。サウルは、槍を手にしていたが、18:11 ダビデを壁に突き刺そうとして、その槍を振りかざした。ダビデは二度とも、身をかわした。

18:12 主はダビデと共におられ、サウルを離れ去られたので、サウルはダビデを恐れ、18:13 ダビデを遠ざけ、千人隊長に任命した。ダビデは兵士の先頭に立って出陣し、また帰還した。18:14 主は彼と共におられ、彼はどの戦いにおいても勝利を収めた。18:15 サウルは、ダビデが勝利を収めるのを見て、彼を恐れた。18:16 イスラエルもユダも、すべての人がダビデを愛した。彼が出陣するにも帰還するにも彼らの先頭に立ったからである。

【序】三人の将軍の病死

つい先日の新聞に、インドネシアで国軍の重要な地位にあった将軍の死が大きく取り上げられました。インドネシアは今、国家の体制を整え直すために大きな試練に立たれています。軍隊も改革を迫られています。内部のぶつかり合いも激しいことでしょう。生き残りをかけた激務と競争のストレスで、この二ヶ月間に三人の将軍が病死したのだそうです。

先週からの続きになりますが、イスラエルの最初の王サウルも大変厳しい任務を背負わされた人だったと思います。貧弱な装備しか持てない兵隊たちを率いて、侵略してくる周辺の敵と戦い、国を守りました。最小の部族の出身でありながら12部族をよくまとめました。イスラエルの最初の王としては、立派に合格点をとった人です。

それだけに彼は病死したインドネシアの将軍たち以上に強いストレスを抱いたことでしょう。彼は精神状態がバランスを失って、悪霊にさいなまれるとしか表現しようのない症状に時々落ち込むように

なりました。すぐれた資質を備え、大きな仕事をした人のこの内面の姿を、今日はもう少し詳しく見てみたいと思います。

[1] 深い喪失感

サムエル記上の17章は、ダビデがペリシテ軍の大勇士ゴリアトと一騎打ちして、打ち倒してしまった有名な記事です。ダビデはサウル王の戦士として次々と手柄をたて、すべての兵士、家臣に喜ばれるようになりました。王が凱旋した時、町の女たちは歌を歌って迎えました。「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った」。サウルはこれを聞いて非常に激しく怒り、悔しがりました。そしてダビデを妬みの目で見られるようになり始めました。

すると次の日、サウルは「ものに取りつかれた状態」(18:10)に陥ります。早速ダビデが呼ばれ、サウル王の傍らで豎琴を奏でて、王の心を鎮めようとなりました。サウルは悪霊に襲われたような症状に陥ることが、以前から見られるようになっていたのです。家来たちは音楽で王の気持ちを鎮めようと考へ、琴の名手を探しました。今も音楽療法とかhealing musicがありますね。そしてダビデがサウル王に召されたのでした。16章の終わりに記されています。

ところがそれまではダビデが傍らで豎琴を奏でると、心が安まって気分が良くなっていたのに、今回は違いました。サウルはいきなり槍で二度もダビデを壁に突き刺そうとしたのです。

更に19章に進みますと、サウルの反応はもっと悪くなり、豎琴を奏でるダビデをいきなり槍で突き刺そうとしたばかりでなく、翌朝彼の家にか来を差し向けて、殺させようとしています。こうしてダビデの逃亡生活が始まりました。ダビデは先ずサムエルの許に逃げました。サウルはサムエルの所まで追いかけて行きます。ところが突然霊に打たれて恍惚状態になり、着物を脱ぎ捨て、サムエルの前で裸のまま倒れて一昼夜を過しています。

繰り返し申し上げますが、サウルは全軍の指揮官として、また王として大変優れていました。その彼が個人的生活ではこのような精神状態に時々襲われるようになったのです。どうしてそうなったのでしょうか。

彼の発作の記事は16章14節から現れます。サムエルが神さまに命じられて、ダビデに油を注いだ記事の直後です。でもこれは密かになされて、ダビデ本人すらその意味を教えられていませんし、サウル王も全く知らなかったことです。これが原因で不安に駆られるようになったのではないでしょう。

するとその前の15章の出来事ということになります。アマレクを滅ぼし尽くせと神さまがお命じになったのに、彼は最上の羊や牛は勿体無いから取り分けてとっておこうとした兵隊たちの要求を、制止することが出来ませんでした。兵隊たちを大事にする彼の良い点であり、だから皆から王として支持されたのですが、でもこれは、何はさておき神さまの言葉には聞き従うべきイスラエルの王として

は、決定的に間違っています。

神さまの言葉がサムエルに臨みました。「わたしはサウルを王に立てたことを悔やむ。彼はわたしに背を向け、わたしの命令を果たさない」(15:10～11)。これを聞いてサムエルは深く心を痛め、一晩中神さまに叫び続けました。それからサウルに神さまの言葉を伝えます。彼ははじめは言い訳していましたが、遂に告白します。

「わたしは、主の御命令とあなたの言葉に背いて罪を犯しました。兵士を恐れ、彼らの声に聞き従ってしまいました。どうぞ今、わたしの罪を赦し、わたしと一緒に帰ってください。わたしは、主に礼拝します」(15:24～25)。

しかしサムエルは身を翻して立ち去ろうとし、サウルが上着を強くつかんだので、上着が裂けてしまいました。サムエルはその時はサウルの強い願いを聞いて一緒に帰り、彼の礼拝に付き合いましたが、それから後死ぬまで、サウルとは会わなくなりました。

サウルのように優れた人が、悪霊にさいなまれるような精神状態になった第一の原因——それは神さまに見捨てられてしまったことから来る、深い喪失感と孤独でしょう。それは具体的には、サムエルに捨てられることとして現れました。サムエルは深く心を痛めて一晩中大声で叫び祈っています。彼と絶交しましたが、死ぬまで嘆き続けています。こんなに愛してくれている人を失うことになったのです。すなわち神を失うとは、自分を包み、支えてくれていたこんなに大きな愛を失うことなのです。彼が大きなダメージを受けたのは当然でありました。

[2] 人が気になって病む

サウルが病的な精神状態に時々襲われるようになった第二の原因は、ダビデに対する過剰なライバル意識でしょう。「両雄並び立たず」と言われます。英雄は二人一緒に存在できず、一方がもう一人を倒すまで治まらないありさまを言います。

自分の政権を長く安定したものにするために、自分に取って代りそうな強力なライバルは早いうちに潰してしまうということがよく言われます。イエス・キリストがベツレヘムで誕生した時、ヘロデ王がベツレヘム一帯の二才以下の男の子を殺してしまったのもそうでしょう。でもライバルを打ち倒す激しい権力闘争に生き抜かなければ仕事ができないなど、悲しい現実ですね。

自分より優れた人が出てきたら、その人に大いに腕を振るってもらった方が、国や会社のためになります。喜んで彼を盛り立てるべきです。それがどうして出来ないのでしょうか。自分が苦勞して手に入れた地位を、易々と失えないと思うからでしょうか。自分より下だった者の下になるなど、屈辱的で耐えられないからでしょうか。

人生の苦難の意義を問う「ヨブ記」に、財産やわが子まで全てを失ったヨブの言葉があります。「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」

(ヨブ記1:21)。

神さまから与えられた自由を用い、人間が世界を破壊して行きます。その悪を抑えて、この世界を少しでも良い世界に回復させようと、神さまは良いお働きを進めておられます。そしてこの私にも仕事や任務をお与えくださったと考えることの出来る人は、神さまから授かった能力を最善に用い、感謝してその任務に当たります。

仕事を自分の手から取り上げられ、他の人に回されたとしても、神さまがその方が良いとお考えになってのことだから結構だ、と受けとめることが出来ます。「主が与え、主が奪う。主の御名はほめられたえられよ」です。失うまいとして、いたずらに悪あがきをしません。平安な心を保つことが出来ます。

しかし神さまを本気に信じる事が出来なかったサウルは、神さまから委託された王の務めという自覚がどうしても薄くなります。そして王の自分より国民の人気を得ていくダビデにとって代わられるという不安を抱きます。ダビデに負けたくない、王位を失いたくないと言う思いが強まるうちに、ダビデに対する妬み、疑い、敵意、恐れで心の平安を失い、日一日とさいなまれるようになりました。

もう一つ、第三の原因があります。サウルが人の目をととても気にしたことです。アマレクとの戦いで大勝利を得、兵隊たちには神さまに背いてまでして分捕り品の最上の物を分け与え、戦勝碑を建て、意気揚揚として凱旋してきました。しかしサムエルから神の厳しい言葉を聞かされ、「兵士を恐れ、彼らの声に聞き従ってしまいました」とサムエルに対しては自分の罪を告白しました。しかし「民の長老の手前、イスラエルの手前、どうかわたしを立てて、わたしと一緒に帰ってください」とサムエルに懇願しています(15:30)。

自分の欠点や失敗を率直に認め、取り繕うことをやめて、神さまと人々の前に誠実に生きるには勇気が必要です。人に捨てられても、神さまからは捨てられてはならないと言う思いが強くなる時にのみ、私たちは誠実に生きていくことができます。サウルは人の目をととても気にしました。そして神の目も気になりました。二つの悩みに引き裂かれていったのです。

[3] 神からの悪霊

イエス・キリストがガリラヤ湖の向こう岸の墓場で、悪霊にとりつかれた人をお癒しになりました。かれは足かせや鎖を引きちぎり、叫んだり、転げまわって石で体を傷つけたりして、誰も取り押さえることが出来ない状態でした。主イエスが「汚れた霊、この人から出て行け。」と言ってお癒しになりました。すると彼は服を着て、静かに座していることが出来るようになりました(マルコ5:1~20)。

このように悪霊の働きとは、人格の調和を破壊して、感情や行動を支離滅裂にしてしまうものです。サウルが時々襲われるようになった精神状態も、まさに悪霊にさいなまれるものだったと言えます。そしてこれは神さまに捨てられ、大きな愛を失ったという喪失感と不安、また神さまを本当に信じら

れない故に自分より優れた人を受け入れられなくなり、妬みや憎しみで自分の心も傷ついていきや
りきれなさ、人の目を気にして体裁を取り繕うことに汲々とするところから、生じたものでした。

ここで、おやっと思ふ表現について触れましょう。サウルをさいなんだ精神状態を「神からの悪霊が
降って」(16:14、18:10、19:9)といわれている点です。新約聖書では「どの霊も信じるのではな
く、神から出た霊かどうかを確かめなさい」(第一ヨハネ4:1)とあります。サウルに槍を振るってダビ
デを殺そうといきり立たせたり、一人の人を墓場でのたうち回らせるなどは、悪霊の仕業です。調和
と平安をもたらす神さまが悪霊を降して人を苦しめると言うのは、矛盾した表現ではないでしょうか。

私はこう考えました。神さまはご自分が選んで王にしたサウルに、神さまからの霊を注いで助けよう
とされます。神の霊は、サウル的人格が統一と調和を取り戻すように働きます。神さまを心の底から
信じること、人の目を気にせず、神さまの前に率直に罪を告白して赦しをいただくこと、こんな者でも
神さまに受けいれられているとの確信を得ること、神さまの大きな愛に包まれて生きる平安を取り戻
させことをしようとしたことでしょう。

そうすれば王位を失うことも、ライバルの存在も恐れなくなります。人から捨てられるのではないかと
怯えなくなります。神さまに用いられて精一杯に働ければそれでよしと、腹が据わります。平安が戻
り、喜びと感謝が溢れてきます。ところが彼はどうしても神の霊に身を委ねることが出来なかったの
です。

サウルには、父の命令に聞き従いろばを探しに野山を歩き回る素直さや、父が自分を心配し始め
たのではないかと案じる優しさがありました。兵隊たちが敵からの分捕り品を自分の物にしておきた
いと求めると、神さまに背いても兵隊たちを大事にしようとする心がありました。だからダビデに対し
ても、「わが子ダビデよ」と声を上げて泣く心も強くあったのです(24:17、26:21)。

でも神さまに全てを委ねることがどうしても出来なかった。なまじっか良い性格の持ち主だけに、妬
みとか憎しみをダビデに向けることで、彼の心は一層苦しみます。そして悪霊にさいなまれるような
精神状態になっていったのではないのでしょうか。神さまの霊を拒む時、私たちの心も体も悪霊の働
所になって、私たちの人格が深く病んでさいなまれていくのです。

ですから私たちにとって、人格の統一と調和を保つように働いてくださる神の霊を受けることは、生
きていく上で欠かせない大切なことです。せっかく神の霊を送られながら、身を委ねずに自分の生
き方を通そうと我を張るものですから、分裂がひどくなる——これは自分の責任です。神からの霊
をきっかけに、自分から悪霊を呼び込んでしまったのです。それを「神からの悪霊」と表現したので
しょう。

[結] 聖霊をいただく

優れた資質を持ち、大きな仕事をした人なのに、サウルがどうしても出来なかった一つの事——

それは神さまを心の底から信じて生きる事でした。神さまの大きな働きを期待して、天に向かって窓をいっぱいに向けて生きていく事でした。

神さま無しでも、自分で強く生きられると言います。でも神さまを失うことは、大きな愛を失うことです。サウルは神さまに聞き従わないことで、サムエルを失いました。神さまを捨てると、神さまから与えられた真実の愛の人を失います。そして愛を失うことで私たちの人格が深く傷つきます。多くの人はその大事さに気が付かないようです。

神さまを失うことで、サウルはダビデに対して異常な妬みや恐れを抱きました。神さまから愛されて、自分にはこんな恵みが与えられていると、恵みを数えて感謝し喜ぶことができたなら、ダビデによって心がかき乱されることも起こらなかったでしょう。失っても、「主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」で生きていけたでしょう。

神さまを失うと、人間だけしか見えませんから、人の目を必要以上に気にするようになります。ありのままの自分をさらして生きていけず、疲れていきます。「全ての人に捨てられても、神さまは私をお見捨てにならない。」という信仰を持つ人は、幸いです。そのためには、自分の罪を神さまの前に率直に告白して、赦しをいただかなければなりません。

神さまは全ての人に神の霊(聖霊)を注がれます。でも信じて受けなければ聖霊の働きを頂けません。聖霊の働きは人格の統一と調和の回復です。聖霊の働きの実は「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」です(ガラテヤ5:22~23)。

皆さん、信仰をお持ちください。サウルの生涯が叫んでいます。心で信じ、口で告白することによって救われます。信じてバプテスマを受ける者に聖霊が豊かに与えられます。信じてバプテスマを受けて、聖霊の実を豊かに結ぶ生涯を送りましょう。